『ICU比較文化』42〔2010〕
Article accepted Oct. 31, 2008*

ICU Comparative Culture
No.42 [2010], pp. 77-121

近代日本における、ある異邦人の宿命
—ヨネ・ノグチの再評価に向けて—

星野　文子

I. 忘れられたヨネ・ノグチ

1926年5月1日刊の文芸誌『日本詩人』の巻頭文で、内田魯庵は「日本の文芸家からノーベル賞金の受領者を詮衡するとしたら、差向き第一に選に上るは野口ヨネ君であらう」(1) と書き出した。インド出身のタゴール（Rabindranath Tagore: 1861-1941）が、アジア人として初めてノーベル文学賞を受賞したのは1913年であった。野口ヨネ君とは、本名を野口米次郎といい、日本ではヨネ・ノグチ、海外ではYone Noguchi としても知られている人物である。内田魯庵はその当初から、日本人の中から候補者を出すとすればノグチだと持論を説いていた。

ノグチは、17歳の終わりに単身渡米し、いつしか詩人を志すようになった。1897年、日本人として初めて英詩集『明界と幽界』(2) をカリフォルニア州で出版した後、渡英し、ロンドンで自費出版した詩集『東海より』(3) は、日本人として初めてロンドンの文壇に認められた。10年にも及ぶ英米生活から帰国後も執筆を続け、その72年の生涯を閉じるまでに書かれた著作は、日本語と英語のものを合わせて、のべ184冊にも上るほか(4)、国内外の新聞や雑誌への寄稿は数百にも上る。ノグチは自身を詩人と呼んだが、詩の他にも、日本の文化、特に浮世絵、能、俳句などについて英文によって西洋に発信したり、自身の西洋での体験を日本人向けに伝え、文学論、芸術／美術論などを多く手がけた文化大使でもあった。また、このように実際に英文学に通じていたノグチは、1906年から、慶應義塾大学英文科の教授であった。そして、何よりも、世界中を舞台に作品を残した彫刻家、イサム・ノグチの父親でもあった。1947年7月13日にノグチが

他界すると、日本人詩人として、ニューヨーク・タイムズ紙にも死亡記事が掲載された[5]。これほどの国際的な業績を伴った劇的な人生ならば、既に神話化されていても不思議ではないはずであるが、ノグチに限って、日本では未だに殆ど知られていないどころか、ごくごく断片的な研究しかされていない。何が、今日に至るまでノグチの知名度をかくも隠ぺいしてきたのだろうか？

ノグチの、日本人として稀にみる業績と、今日の無視のされ方との間に横たわるギャップは、あまりに深く大きい。なぜこのような状況が生じたのだろうか？その一番大きな要因は、ノグチ自身が1921年（大正10年）に出版した彼の初めての日本詩集『二重国籍者の詩』に収められた自らを語る序詩にあると考える。

日本人が僕の詩を読むと、
「日本語の詩はまずいね、だが英語の詩は上手だろうよ」といふ。
西洋人が僕の詩を読むと、
「英語の詩は読むに堪えない、然し日本語の詩は定めし立派だらう」といふ。

実際をいふと、
僕は日本語にも英語にも自信が無い。
云わば僕は二重国籍者だ・・・・
日本人にも西洋人にも立派になりきれない悲しみ・・・・
不徹底の悲劇・・・・
馬鹿な、そんなことを云うにはもう時既に遅しだ。
笑ってのけろ、笑ってのけろ！[6]

当時の日本人には容易には為し遂げられないほど多くの業績を積み上げた、当時50歳直前のノグチは、この詩で、表面的には謙遜や自嘲を、そして、水面下では、日本と英米両方に通ずるという特権を自信と誇りをもって表わしたかった

と読むこともできる。だが、この序詩が、あまりに文字通りに受け入れられたために、自虐的な作品となってしまった。この序詩をあっさりと文字通りに受け止めて、いち早く反応したのは、今ではノグチよりも遥かに知名度がある詩人の萩原朔太郎（1886-1942）であった。そして、その後多くの研究者が、萩原朔太郎の位置づけを基に、それを踏襲する形でノグチについて論じてきたのである。

ノグチの長女、一二三の夫であり、美術評論家であった外山卯三郎は、ノグチの業績を何とか後世に残そうと、ノグチの17回忌を機に1963年から1975年にかけて、ノグチに関する研究を4冊の書籍にまとめた。[7] そこに納められている数々の論文のうち、齋藤勇、春山行夫、佐藤栄一、山宮允、服部嘉香、前田鉄之助、三好達治、大江満雄、尾島庄太郎、矢野峰人、近藤東、亀井俊介、金子光晴、井上譲治らは、『二重国籍者の詩』の自序について触れており、そのうちの多くが、萩原朔太郎の論に同意を示している。そして、更に注目すべき点は、これらの研究者たちは、ノグチを詩人として論じているにも関わらず、ノグチの序詩以外の詩について、殆ど触れていないのである。外山は、『詩人ヨネ・ノグチの詩』で、「［ノグチは］そのイギリス人的なユーモアを喜ぶ気持ちが多分にあって、再度のアメリカ旅行を終わって帰って来たばかりの、最初の日本詩集『二重国籍者の詩』の序詩として、ユーモアたっぷりの二重国籍者という言葉を使用した序詩を入れ…このイギリス流のしゃれを理解しない日本人の詩人達は、ヨネ・ノグチを本当の二重国籍者だと考えたり、萩原朔太郎流の「外国生まれの異国観光団」」[8] のようにノグチをみるようになった、と書いた。外山は恐らく、ノグチの印象を一変させたかったに違いない。だが、ノグチの「ユーモア」のセンスが、あまりにも日本的でなかったために、誤解が解かれることなく、今日までノグチが日本の社会や歴史、ことに文学史からは疎外されているように見えるだけではなく、彼の海外での業績は日本で正当に評価されてこなかったのである。こうして、『二重国籍者の詩』以来、ノグチは尊敬されるべき対象でなくなり、結果的に自虐行為或いは自滅行為となってしまった。彼は、皮肉にも自身で二つの文化の溝に落ち込んでしまったのである。

萩原朔太郎はノグチより11歳も年下で、ノグチについて論じたときは40歳であった。萩原朔太郎は、ノグチの詩集に一定の評価を与え、「真に充実した内容」[9] であり、特に観念、哲学、思想という西洋の詩の特徴を有している点に於いては、「日本詩壇への教訓」[10] としなければならないほどだと認めている。だが、西洋からの教訓を日本に紹介したノグチは、萩原朔太郎の言葉を借りると、その詩の題材の選び方や表現からみえるように、「根本から西洋詩人の情操」[11] を持つ「完全な外国人」[12] であった。そして、日本と西洋の間には距離があり、「欧米人が真に日本の文明や文学を知るというのは…直接的には絶望的」[13] であるため（日本人が欧米人の文明や文学を知る可能性には一切触れず）、「和洋両語に通づる混血児」[14] が媒体となることにより、その困難極めた、不可能と思われる理解を可能にする、とまとめている。しかし、一度も国外へ出なかった萩原朔太郎は、ノグチが海外で達成した業績は知らなかったであろう。萩原朔太郎にとってノグチは「悲劇」[15] であり、彼の書く詩を「不満」[16] と感じていたのだった。「表現が甚だ下手カス」[17] であるがために「地中に埋もれている宝玉の光を連想」[18] してしまう、というのだ。これほど辛口に評価されているにもかかわらず、具体的な詩を例にあげて論じられていないため、客観的に考えれば説得力に欠ける議論である。だが、そこから、日本と西洋の相互理解へと議論を大きく展開させ、東洋や日本の象徴としてノグチを見ていた欧米の視線と、日本人のノグチへの理解があまりに対照的であるように、要するに西洋と日本の間には驚くべき間隙がある、と論じたのであった。当時から、萩原朔太郎は「二重国籍者としての野口氏は、その立場からしてエトランゼ」[19] といい、日本の文壇にとって有益な存在となり得たノグチを、受け入れようとしなかった。このような萩原朔太郎の主観的な解釈がその後のノグチの理解を全て狂わせてしまったのだ。

ノグチがこのように異質の日本人として軽視され、疎外されたまま終わってしまうような人物でないことは、彼の経歴を見れば明らかである。先に述べたように、ノグチは自身を詩人として見ていた。ノグチの全著作はのべ184冊（改訂版

含む）にのぼるが、その中で24冊の詩集（内1冊は未出版）のうち、英詩集は10冊、日本詩集は14冊である。それらの詩集に含まれている作品の数は、英詩がのべ432、日本詩がのべ677、合わせて、のべ1109である（ノグチの詩については、後章で触れる）[20]。ノグチの職業の一つは詩人と呼んでも異論はない作品の量である。

更に、詩の数もさることながら、詩人として作り上げたノグチの人生は、当時としては、もちろん現代としても破格の広がりをみせていた。ノグチは、今では英米文学史に揺るぎない名声を刻むような著名な作家たちから認められた、はじめての日本人詩人だったのではないかと思われる。ウァキン・ミラー（Joaquin Miller: 1837?-1913）というアメリカ詩人は、4年もの間、ノグチに住と食を与えただけではなく、エドガー・アラン・ポオ（Edgar Allan Poe: 1809-1849）やウォルト・ホイットマン（Walt Whitman: 1819-1892）など、その後のノグチの詩や生き方に大きく影響を与えたアメリカ人作家や詩人の作品をノグチに紹介した。ホイットマンと直接の友人だった詩人ミラーと暮らしたからこそ、カリフォルニアの詩人達、エドウィン・マーカム（Edwin Markham: 1852-1940）、チャールズ・ワレン・ストッダード（Charles Warren Stoddard: 1843-1909）や、出版に携わっていたジレット・バージス（Gelett Burgess）、ポーター・ガーネット（Porter Garnett）らの面識を得て、彼等のコミュニティで詩を書く好運に恵まれたのである。そして、詩人ミラーを通じて、出版社への繋がりができ、『ラーク（*Lark*）』誌に投稿を重ねたノグチは、ついに1897年、22歳という若さで英詩集『明界と幽界（Seen and Unseen）』を出版し、“Oriental Whitman”[21]や“Stephen Crane with all the affectation removed”[22]などと形容された。

ロンドンでノグチの詩をいち早く認めたのは、アメリカ人であるホイットマンの詩をイギリスで最初に賞讃したイギリス人文芸評論家として知られている、ウィリアム・マイケル・ロゼッティ（William Michael Rossetti: 1829-1919）であった。“[Noguchi's poems] are full of a rich sense of beauty, and of ideal sentiment. In fact the essential excellence of the poems and the particular quality

of their excellence surprise me”[23] と直接述べられただけではなく、ロゼッティからお茶に招待され、彼の書斎に招かれたノグチは、そこにあった大きな長椅子に腰掛けたところ、それは詩人シェリー（Percy Bysshe Shelley: 1792-1822）が亡くなる前夜に横たわって休んだという歴史的な長椅子だったというエピソードもあるくらいに親交があった[24]。また、このようなノグチのロンドンに於ける成功は、大西洋を渡り、“Of course Mr. Noguchi is a no unfamiliar name to us on this side”[25] とアメリカでも話題になった。ロゼッティの他にノグチと個人的に交流があった文芸家は、ノーベル文学賞受賞者のウィリアム・バトラー・イェイツ（William Butler Yeats: 1865-1939）をはじめ以下の通りだ[26]。

英文学者

ラッセルズ・アバークロンビー (Lescelles Abercrombie)
リチャード・オールディントン (Richard Aldington)
ウィリアム・アーチャー (William Archer)
ロウレンス・ビニヨン (Laurence Binyon)
ゴードン・ボトムリー (Gordon Bottomley)
ロバート・ブリッジェズ (Robert Bridges)
エドワード・カーペンター (Edward Carpenter)
シドニー・コルヴィン (Sidney Colvin)
エドワード・ダウデン (Edward Dowden)
コナン・ドイル (Conan Doyle)
エドマンド・ゴッセ (Edmund Gosse)
アイザ・ドゥーフス・ハーディ (Iza Duffus Hardy)
ウィリアム・マッケイ (William MacKay)
ジョージ・メラディス (George Meredith)
ハロルド・モンロー (Harold Monro)

アメリカ文学者

ジレット・バージス (Gelett Burgess)
ウィッター・ビナー (Witter Bynner)
アイナ・クルブリス (Ina Coolbrith)
ジョン・グールド・フレッチャー (John Gould Fletcher)
ゾナ・ゲイル (Zona Gale)
ジュリアン・ホーソン (Julian Hawthorn)
エドウィン・マーカム (Edwin Mahkam)
ウァキン・ミラー (Joaquin Miller)
ハリエット・モンロー (Harriet Monrow)
ジョセフィン・ピーボディ (Josephine P. Peabody)
フランク・パットナム (Frank Putnam)
フランシス・シェーマン (Francis Sherman)
チャールズ・ワレン・スタッダード (Charles Warren Stoddard)
イーディス・トーマス (Edith Thomas)
ホラス・トラウベル (Horace Traubel)

英文学者

スタンジ・ムーア (Stunge Moore)

ジョン・ミドルトン・マリー (John Middleton Murry)

エズラ・パウンド (Ezra Pound)

アーサー・ランサム (Arthur Ransome)

ウィリアム・マイケル・ロゼッティ (William Michael Rossetti)

レズリー・ステファン (Leslie Stephen)

アーサー・シモンズ (Arthur Symons)

ハーバート・ジョージ・ウェルズ (Herbert George. Wells)

ウィリアム・バトラー・イェーツ (William Butlar Yeats)

インド文学者

ガンディー (Mohandas Karamchand Gandhi)

サロージュー・ナーイドゥ (Sarojine Naidu)

タゴール (Rabindranath Tagore)

英国の文壇は、独自の長い歴史と伝統を重んじているばかりに、外国からの新しい作風を好まないかのようにみえる。だが、地位も名声もなく、日本人であるという他は海のものとも山のものともつかないノグチを、彼が書いた詩だけで寛大に受け入れた。ノグチは、ロンドンで出版した『東海から（From the Eastern Sea）』の表紙の名前の横に、自らの考えで "Japanese" と明記した。それにも関わらず、亀井の解説によれば、アーサー・ランサム（Arthur Ransome）なども、*Portraits and Speculations* 所収の "The Poetry of Yone Noguchi" という記事に、"Our concern is not with the nationality of this writer, but with his conception of the poet, and with his poetry" [27] と表明しており、また、同記事を読んだD.H.ローレンス（David Herbert Richards Lawrence: 1885-1930）でさえもノグチを、その国籍ゆえでなく一人の詩人として意識していたのは、彼の手紙の文面に明らかである [28]。1913年、ノグチはコバーン（Alvin Langdon Coburn）とロバート・ブリッジェズが話したことがきっかけでオックスフォード大学に招待され、日本詩歌論について講演し、フランスの詩人マラルメ（Stéphane Mallarmé: 1842-1898）を歓迎して以来のできごとだと迎えられた [29]。また、1919年秋から

1920年春、アメリカのジェームズ・ポンド（James Pond, The Pond Lyceum Bureau）に招待され、全米の各大学で日本の詩歌についての講義をして廻り、アメリカでさらに詩人としての知名度を上げたノグチは、1924年のアメリカ詩のアンソロジー『ニュー・ポエトリー（*The New Poetry*）』にタゴールと並んで作品が収められた、たった二名のアジア人であった[30]。1935年にはインドへ渡り、同様にいくつかの大学で講義をしている。ノグチのこのような業績が、キャノンに含まれる内容が変わり続けているアメリカにおいて見直されたのか、2000年に入ってからいくつかの米詩アンソロジーに、日系アメリカ人でもないにもかかわらず、ノグチの詩が含まれているのである[31]。イェイツやパウンドとの交流があったことから、ノグチがイマジズム（Imagism）において重要な働きをしたというのは注目すべき点である。英米にて、これほどに活躍していた日本人は、他に類を見ないだけに、日本文壇に見られる軽視は、ノグチに対する正統な評価の欠如を物語っている。

ノグチの生前、その生き方に理解を寄せたのは、数人経験を有する芸術家たちだった。詩人の金子光晴（1895-1975）はフランスを中心に海外へ訪問・滞在した詩人だが、ノグチが理解されていないのは、藤田嗣治（1886-1968）がフランスで成功したために日本の画家たちからボイコットされたように、「日本人の偏狭さの故かもしれない」[32]と指摘している。藤田嗣治も、ノグチのように、青年時代に単身国外（フランス）へ出た。売れない画家として経済的に苦労を重ねた時代を経て、次第にパリの画家たちに認められていった。その後帰国したが、第二次世界大戦中に戦争画を書いたとして批判を浴びるようになる。やがて戦後の日本を後にし、フランスでその生涯を終えたが、1969年、藤田嗣治の死後二ヶ月後に、日本政府は、勲一等瑞宝章を追贈した。国際人であった藤田関係の書籍の多くは現在、東京上野の国立西洋美術館のギャラリーに、他の西洋人芸術家たちの書籍と共に並んでいるが、このように日本で受け入れられるまでに随分長い時間を要し、しかも本人が死後のことであった。同じく詩人でフランスで数年を過ごした川路柳虹も、「野口氏の地位は世界的に認められていいのである。

ただあまりに吾々に近く置かれてあるがために時に吾々はその人の価値を充分に見究めることに失敗するものである…」[33] と認めている。また、ノグチにノーベル文学賞の可能性を示した最初の人物、内田魯庵は、志賀重昂宅を訪問した時に、十数年前のお茶を給仕していたノグチが、今では世界的詩人となったことを賛美すると同時に、「コチラは依然として…小さな日本の文壇の末班に軽うじて有るか無きかの籍を与えられておる」[34] と、ノグチと自分自身の活動範囲の違いを認め同時にノグチへの賛辞を贈っていたが、彼等だけでは日本の文壇全体のノグチに対する評価を変えられなかった。

ノグチや、ノグチと時代を共有してきた詩人たちが他界した後、ヨネ・ノグチはどのように理解されてきたのだろうか。ノグチは、他界する二週間ほど前、外山に、「野口米次郎全集を出してほしい」[35] と言い残したが、遺族の中に誰も意欲的に実行するものが居らず、ついに実現されなかった。外山は、英文の方がノグチの功績が現れていると思い、当時アメリカにいたイサムにヨネ・ノグチの英文全集作成について打診したところ、アメリカではもうヨネ・ノグチを忘れているから不可能[36]、という返事がきて諦めた。その後日本では、ノグチの死から5年後の1951年から、数年に1～2名くらいの割合でノグチの研究を行う者が現れ、学術誌や学会論文の投稿などを通してそれらを発表している。ノグチの自然観、詩集、日本文学精神、文学論、イマジズムとの関係、ノグチの書いた小説や英語俳句、英米での彼の細かい暮らしぶりや活躍、彼の人生の一部など、テーマは様々であるが、研究者がいなかったわけではなかった。また、1960年からは、外山、現在東京大学名誉教授である亀井俊介、それに当時の青山学院大学の教授、渥美育子がヨネ・ノグチ・ソサイエティを結成し、英語書簡を活字化して書籍にまとめたり[37]、英詩集復刻版を作ったり、ノグチを直接、間接に知っていた学者や知人達の文章を集めた『詩人ヨネ・ノグチ研究』を4冊出版したりした。だが、これらについては新聞等で書評が取り上げられることはあっても、第2版を出すには至らなかったうえ、身内の手に収まってしまったようで、今日では入手することすら困難である。詩人、歌人たちの中でも、今でも義務教育課程の教

科書に含まれるなどして、比較的知られている者たち、例えば北原白秋、与謝野晶子、萩原朔太郎、高浜虚子などに対し、ヨネ・ノグチは一般的には無名のままにとどまっているのが実情である。

『二重国籍者の詩』以外にも、ノグチへの評価や理解が遅れている理由は考えられる。まず、ノグチの実績の多様さ故の、統一的な視野の下に位置付けることの困難さが挙げられる。津島に生まれ、アメリカ（サンフランシスコ、オークランド、シカゴ、ニューヨーク、ボストン）及びイギリスのロンドンに合わせて十数年住むがアメリカ国籍は得ずに帰国、藤沢市常光寺に6ヶ月滞在、鎌倉円覚寺六庵に滞在。その間、慶應義塾大学の英文科で教鞭を取り、オックスフォード大学を筆頭に、アメリカ及びインドの諸大学で講演、藤沢市常光寺へ埋葬されるなどによって、世界各地の地元レベルのメディアを一時興奮させ、各地の歴史に名前は刻んで来てはいても、そのままでは雑然としていて一貫性がない。

また、この世を去るのが早すぎた。高村光太郎や藤田嗣治は戦後の混乱期を、世論との戦いと自己反省の中で生き続け、多少は自らで名誉挽回を果たすことができた。その点、ノグチは戦後丸2年を待たずに他界した。極めてタイミング悪くこの世を去ったと言わざるを得ない。1986年、高井蒼風が出版した1冊の小さな本『英詩人ヨネ・野口の栄光：その英米における遍歴苦闘の秘録』[38] は、ノグチの業績への賛辞や、なぜこんなにも評価が遅れているのかという疑問をそのまま世に投げかけたようなものだった。ノグチの「世界に広く日本の芸術精神を闡明した一大功績はラフカディオ・ハーン以上の文化的偉業であり、日本有史以来、日本の和歌、俳句、美術、能楽から万葉集、日本書紀などの古典文学の真髄までを広いレパートリーに把握して外国に日本文化精神を闡明した功績は文学者のまさしく第一人者と賞讃しても過言ではない」[39] にもかかわらず、「政府は文化勲章ひとつ与えていない」どころか、「日本のマスコミや、有名な雑誌社、出版社の不認識も甚だしく、一社としてこの詩人の死後、その大芸術を認めず、一冊の伝記すらいまだなく、死後四〇年にならんとする現在[40] まだ全集一つ出していないのである」[41] と続く。だが、死後61年経った2008年においても、状況

は殆ど変わりない。ヨネ・ノグチ・ソサイエティのメンバーだった亀井俊介が指摘する通り、「ヨネ・ノグチについての本格的な伝記はまだなく、彼の英文著作活動の全貌を伝える研究所もまだない」[42] のである。ノグチの著書全てをまとめて閲覧できる場所等は、筆者の知る限りでは一つもなく、ノグチが長年教鞭を取った慶應義塾大学ですら、彼の全著作を収蔵してはいないのである。

日本は明治時代に入って、それまでの数百年に渡る鎖国時代の空白を取り戻すかのような勢いで西洋化に努めたと同時に、日本の伝統的文化を維持する現象があった。その結果、実際にノグチのように本物の国際人になって帰国した日本人を受け入れる準備が整っていなかった。ノグチは、日本人にとって初めてとなる数々の記録を残したが、そのノグチについて、ノグチの息子のイサムが、「父の観点は日本では理解されていなかった。日本人は、歴史的に見て父がやってきたことがどんなに重要な意味を持つかということを理解していなかった」[43] と悔やんでいるように、ノグチは、時代の先を行きすぎていたのである。

藤田嗣治も、日本人でありながら国際人であるという生き方について、以下のように述べている。

> 私の体は日本で成長し、私の絵はフランスで成長した。私には日本に係累があり、フランスに友達がある。今や私は日本とフランスに故郷をもつ国際人になってしまった。私には二カ国ながら懐かしいふるさとだ。私はフランスに、どこまでも日本人として完成すべく努力したい。私は世界に日本人として生きたいと願う。それはまた、世界人として日本に生きることにもなるだろうと思う[44]。

ノグチも、アメリカやイギリスでは、日本人として精一杯生きようとし、日本では世界人として生きようとした。藤田嗣治やノグチに共通して見いだせることは、二カ国を懐かしい故郷にすることを通して、自分自身の第三の文化を創り出してきた生き方である。ノグチらが生きた時代は、彼らほどに海外を知り、海外

に業績を残してきた日本人は今日に比べて圧倒的に少なかった。従って、多くの人々は藤田嗣治やノグチのような者たちを、「異邦人」として片付けていた。ところが、今日は、異邦人、すなわち、二国や二文化を越えた（trans-）第三の文化を持つ、またはそこに生きることを余儀なくされている人々も少なくない。このような、「トランスカルチュラリズム」[45] を生き方としている人々は、移民や亡命という形をとっていないが、二カ国やそれ以上の国とその文化に創造力の源泉があるのだ。ノグチのようなケースもまさしくそれである。人が移動し、それに伴って文化が既存のものを越えていくのは、今日の世界的な現象なのである。

このようなトランスカルチュラリズムが大きな課題になっている時代だからこそ、本論文は、出来るだけ多くのノグチの業績を明らかにすると共に、ノグチを再評価するべきだと提案するものである。現代では、ノグチのように一度国外に出て、ホスト国で心地よく受け入れられた後で帰国して母国で暮らす人々は以前よりもはるかに増えたはずである。だが、帰国先の周囲の人間がその経験に対して理解や正当な評価を示さずにいることが、国外を経験した者が再び母国に根を下ろしにくくなる環境を生み出し、母国に居ながら疎外感を感じるような、或いは、どこか他に本来所属すべき場所があると感じる者が少なくない。そして、彼等個人の中では、「トランスカルチュラリズム」を通して、既に文化変容が行なわれているにも関わらず、周囲の無理解によってあるいは周囲の理解を求める行動によって、余計に疎外され、異邦人（L'Etranger）とならざるを得ないのである。その意味で、ノグチ研究は、今後増え続けるであろう、トランスカルチュラリズムとともに生きている人々の先駆けの研究となるはずである。

II. 詩人としてのヨネ・ノグチ

これまで、比較的、伝記的な部分を中心にノグチの人生を見てきたが、本章では、ヨネ・ノグチが、どのように日本人の詩人として生きてきたかということを、実際に彼の詩作品を通して分析する。ノグチは、明治時代には日本語で一つも詩を発表していないことから、明治詩人には分類されていないことは正当であ

ると考える。だが、大正や昭和には詩集が刊行されていたにもかかわらず、所謂、近現代の詩大系に於いてすら、詩人として収録されるわけではない。このような独立的な立場から、ノグチは英米で親交を深めた詩人達との交友を楽しみ、時に議論を重ねながら、理解者の少ない日本社会で一人の日本人詩人として自身の詩を模索し続けた。

1．詩集作品の全貌

まず、現段階で判明している、ヨネ・ノグチの詩作品の全貌について紹介したい。下記の表は、ノグチの詩集を題名、出版社、出版年とそれぞれの詩の数についてまとめたものである。英日の区別なく出版年順に並べた。表のとおり、英詩集10冊、日本詩集14冊の合わせて24冊、詩の数は合計で1,109であった。

詩集名	出版社	出版年	収録詩数
Seen and Unseen 1st ed.（このうちの9の詩は、*Lark*誌を通して既に出版されたものだった。）	San Francisco: Gelett Burgess & Porter Garnet	1896	50
The Voice of the Valley	San Francisco: William Doxey	1897	8
From the Eastern Sea 2nd ed.	London: Unicorn	1903	36
Japan of Sword and Love by Joaquin Miller and Yone Noguchi	東京：かなお文永堂	1905	20
The Summer Clouds, Prose Poems	東京：三陽堂	1906	62
The Pilgrimage	鎌倉：The Valley Press	1909	84
Kamakura	Yokohama: Kelly&Walsh	1910	1
Japanese Hokkus	Boston: The Four Seas Co.,	1920	84
二重国籍者の詩	東京：玄文社	1921	66
林檎一つ落つ	東京：玄文社	1922	85
沈黙の血汐	東京：新潮社	1922	60
山上に立つ	東京：新潮社	1923	63

詩集名	出版社	出版年	収録詩数
最後の舞踏	東京：金星堂	1923	74
我が手を見よ	東京：アルク	1923	67
表象抒情詩1	東京：第一書房	1925	59
表象抒情詩2	東京：第一書房	1926	52
表象抒情詩3	東京：第一書房	1927	87
表象抒情詩4　（散文詩）	東京：第一書房	1927	80
The Ganges Calls Me, Book of Poems	東京：教文館	1938	66
強い力弱い力	東京：第一書房	1939	19
伝統について	牧書房	1943	9
宣戦布告	東京：道統社	1942	6
起てよ印度	東京：小学館	1942	64
The Blood of Silence and Other Poems [46]	Unpublished		21
合計　24冊			1109

初めに明記しておきたい注意点は、上掲の表には、詩集として刊行された作品が全て含まれているかが不確かなため、表に示した数は今後変更される可能性が多分にあるということである。また、ノグチの日本詩は、彼自身の英詩を邦訳したものが大半であった。一度邦訳した詩を、ホイットマンが『草の葉（Leaves of Grass）』の改訂版を十数回も出したのを見習って、ノグチは常に自分の作品をより良いものにしようと何度も改訂したのであった。多い時は、一つの作品に対して、三回もの変更が加えられている。例えば、「向日葵（To The Sunflower）」という詩は、英詩『巡礼（*Pilgrimage*）』[47] の中に納められていたが、それが「向日葵」という題名で邦訳され、『二重国籍者の詩』にて発表された。その後、『野口米次郎英詩選集』、『林檎一つ落つ』、『表象抒情詩集』に収録される度に、三回に渡ってわずかな字句の入れ替えなどをした改訂版が掲載された [48]。そのため、上記した1109という詩の数は改訂版をそれぞれ一つの詩として計上した合計数である。どの詩が、どの詩集で改訂されて収められているかは、外山卯三

郎『詩人　ヨネ・ノグチ詩』（東京：造形美術協会出版局, 1967年）の付録にまとめられている。上の表は合計数だとはいえ、ノグチが多くの作品を残したことに変わりはない。戦前に書かれた日本詩をおさめた『表象叙情詩』の4巻はノグチの集大成と言われる。生涯、自身の詩を改訂し続けたノグチは、「彫ったり刻んだりして、生涯その手を休めることを知らない宝石作りのような詩人であった」と外山は結んでいる[49]。

2.『二重国籍者の詩』とその評価

それにも関わらず、ノグチの詩の殆どが、適切な評価を受けてきたとは言い難い。具体的に論じられることすらなかったのである。その理由は、本論の冒頭に示したように、ノグチが初めて出版した日本詩集『二重国籍者の詩』の序詩の影響が大きいと考える。

ノグチが帰国してから、初めての日本詩集、『二重国籍者の詩』を発表するまで、約17年の空白が続いた[50]。17年とは、ノグチが海外で暮らした年数の二倍近くである。その間、慶應義塾大学の英文学部で教える傍ら、英語で詩を、日本語で随筆、散文、評論などを書き、29歳の若さで帰国したノグチも46歳になっていた。何故、17年もの年月を要したのだろうか。すでに英詩人として国際的な名声をかちえていたにもかかわらず日本詩を書かなかった理由として、外山は、「日本語つまり日本の言葉というものに対する困難さ」[51] を上げている。英詩では詩と日常一般の人たちの使用している言葉が区別されているが、日本では、詩人と一般の人たちの言葉が同じであるため、詩を形成する精神的な世界を構成することができなかったと外山は論じている[52]。更に、日本の詩は、英米詩に比べて不自由で制約だらけであったために、ノグチは常に「アウトサイダー的な立場」[53] を取り続けていたようである。もう一つの理由として、帰国後すぐに立ち上げた「あやめ会」で、日本と英米の詩人達をつなごうと試みたが日本の詩人たちと上手くいかなかった。その経験が、日本の詩人界から、ノグチを疎遠してしまった、と考えられるのではないだろうか。そのために、日本語での詩

は作らずに、常に日本の詩人社会を眺めていたようである。ウィリアム・ロゼッティは、ノグチを一番始めに認めた英国人だが、そのロゼッティが、詩について“If there is poetry at the heart of the verse written in Nippon, its appeal holds good on the banks of the Thames”(54) と比喩を使いながら、“This sort of diversity is no disadvantage but an added delight”(55) だとノグチの詩を賞賛している文章が、英詩集『巡礼』の後書きに掲載されている。ノグチはこのロゼッティの言葉を誇りに思っただろう。だが、その後更に12年も日本語で詩を書くことを躊躇していた。外山の推測によると、1919-1920年のアメリカ講演旅行の際、国際的詩人としてのキャリアを自覚したノグチは、やっと、その業績を日本でも見てもらおうと思った、ということである。そして、それまで書いた英詩の中から53篇を邦訳して『野口米次郎英詩選集』(56) を作ろうとしたところ、その編集者である玄文社の長谷川巳之吉がノグチに興味をもち、日本詩集『二重国籍者の詩』の出版も約束したのだという(57)。

『二重国籍者の詩』も基本的には英詩の邦訳であるが、『野口米次郎英詩選集』に収録されたものに、更に磨きをかけたものであった。それに、長谷川巳之吉が特殊な出版技術を使い、濃褐色のバック・スキンに花瓶の花の金版押しをほどこした森田恒友画伯の装慎の豪華本として出版された。ほぼ同時期に、微妙に違う邦訳で出来上がった詩集を2冊出版していたことになるが、『二重国籍者の詩』は、デザインも凝ったように、ちょっと「しゃれ」ようと思い、序詩に入れた詩が、結果的には、「他人を引落とし、悪口をいい、やきもちをやき、陰口を喜ぶ日本人たちに対して好個の証明書を渡したような結果になってしまった」(58) と、外山は残念がっている。一番悔しい思いをしたのはノグチ本人に違いない。

その萩原朔太郎の強いノグチ論が受け入れられたことにおける、ノグチへの情けのようなものもある。山宮允は、「野口の二重国籍者の自覚は間違いではないが、悲しむべき悲劇ではなく、ラフカディオ・ハーンの場合同様、自他共に祝福してよい特権の自覚ではなかったろうか」(59) と、むしろ萩原朔太郎の意見を否定している。亀井俊介は、本人も容易でなかっただろうと察すると同時に、彼に

おける東洋と西洋の意味を考え続けても何も結論が得られないどころか、却って複雑さを感じる[60]、としている。多数の同情も寄せられている。英文学者、齋藤勇は、ニコルズが、ノグチがどちらも（日本も西洋も）裏切ることができなかった「さびしさに深い同情」を見せた事を引用している[61]。詩人の佐藤一英は、自ら語った二重国籍者の矛盾を統一調和すべく一生掛けて戦った[62]、という風にノグチの一生を見ている。同じく詩人の服部嘉香は、『二重国籍者の詩』の序詩に、長年の活動が正しく理解されてこなかったという「無念の気持ち」[63]が表われていたといい、ノグチを「孤独の心境に沈潜された詩人」[64]と呼んで同情を寄せた。これらの反応全てを並べてみると、改めてこの『二重国籍者の詩』の序詩が、ノグチを語るにあたり、どんなに大きな影響或いは固定観念を与えたか、明確である。

ノグチ自身としては、その後、彼の日本詩が高い評価を受けなかったという点では悔しかったかも知れないが、一方で、彼が歩んだ人生、特に英米でも通じる詩人であったという人生については、後悔などは微塵も感じていないであろう。実際にノグチは、「或る人は私に向って「君は極点まで日本人で、しかも極点まで外国人だ」といふ。私はその人に、よく見て呉れたと感謝する。極点の日本人として、私は情熱に動かされ、極点の外国人として私は芸術を客観視できる。私はそれ等の両極点を結びつける橋だ」[65]と、自身の立場をわきまえ、その喜びを表わしているのだ。当然のことながら、ノグチの感じていたように、日本以外の国にも活躍の場を持ち、母国語以外の言語でも自由にコミュニケーションが可能なだけでなく芸術家として活動でき、翻訳などを通さずにその作品が認められていたことは、悲劇ではありえなかった。その逆に、充分に喜び、誇りに思うべき出来事である。そのような機会を作ることもなく自国の温室浸りになってしまった多くの日本人詩人等は、実はノグチが羨ましかったのではないだろうか。

3. ヨネ・ノグチの英詩

ここで、まず、ノグチの英詩を見てみたい。英詩の方が、ノグチが若い時に書

いたものであるし、これがノグチの出発点だからである。ノグチの英詩は、これまで日本で正式に評価されて来なかった。大正・昭和時代の文壇にあり、かつ英米文学に興味を持った日本の知識人たちは、英国やアメリカで話題になっている詩人の作品、たとえば、ホイットマンやウィリアム・ブレイクなどを読んだり翻訳したりし、『草の葉』などは、いくつもの邦訳が出ていたが、そのホイットマンの弟子ミラーの弟子であるノグチの英語の作品は、全くと言ってよいほど注目してこなかった。亀井俊介は『近代文学におけるホイットマンの運命』(66) の中で、ホイットマンとノグチの詩の相違点を述べているが、それ以外のノグチと同時代の殆どの日本の詩人たちは、ノグチの英詩を実際に読みもしないで、ノグチが英語で詩を書くという行為に対して、批判していたのだ。

その議論は、『二重国籍者の詩』が出版された5年前には、既に読売新聞上で繰り広げられていた。同じく詩人であった岩野泡鳴は、ノグチが英語で詩を書く事について、「自国語を以て歌っていない点において多大の根本的間隔がある」(67) と非難した。これに対してノグチは「あたかも赤子が言葉を学んだやうに、自然に静かに［英語を］習練した自分、之を言替えると私が使用する文章上の英語は所謂英語で無くて、私自身が創作した特種の言語であれば、私のみが自由と秘密を握っているのであると思って居るのですから、自分は普通の論理で律せられるのを不愉快に思ひます」(68) と反論している。更に、「私の確信と熟練は如何なる路を辿って来たのであるかを、英語の文章上では実際に経験を持って居られぬ岩野君は恐らくは知られまいと思います」(69) と続けているが、ノグチのこのような反論は充分に納得できる。

ノグチの英語がどの程度のものだったのか、詩の完成度や、英米で知名度を得るに至るまでの苦労は、日本の外で実際に暮らし、外国人として諸国で何かを成し遂げようと試みた人でない限り理解するのは難しいであろう。ノグチは、どのくらいの自信を持ってロンドンへ向かったのか定かではないが、ロンドンで得た反応で、非常に大きな自信と満足を得たことが、次の文章にあらわれている。「…別にして置いた三磅（3£）を棒に振り十六頁の小冊子を作って倫敦の面上へ

投付けた…倫敦の文壇は驚いた。どんなに倫敦は巨大な胴體の象でも、くすぐる所はたった一つだ…今日から思ふと、何だか奇蹟にも近いやうな気がする…」[70]。実際、ロンドンは大都市であり、アメリカのサンフランシスコに比べて、その歴史は長く伝統は重い。ロンドンに辿り着いたところで、市内をどのように歩き回り、どのようにして出版社の場所を知り、どのようにして訪ねては断られる日々を送ったのか。また、どのようにして「肉屋や八百屋の使用する褐色粗紙に印刷」[71] してもらったのか。また、どのようにしてロンドン市内や近郊の著名な英国文壇の面々の居所を知り、自費出版の冊子を送りつけたか。例え自費出版と控えめに言っても、その工程を想像するだけで、かなりの労力と行動力を要することは誰の目にも明らかであろう。見知らぬ土地でそれらを成し遂げ、好評を博したのであるから、並大抵の努力や実践力ではないはずである。ノグチと一度も外国行きを共にしなかったノグチの妻まつ子も、ノグチのそのような積極性と行動力については、本当の意味で知り得なかったかも知れない。幾度か海外経験を持つ金子光晴のような詩人が、英語が下手では英米の詩壇にセンセーションを巻き起こす筈がない、と指摘しているとおりで、外国語で詩を書いて認められるなど、昔も今も実に困難なことをノグチはやり遂げたのである。

日本では、西洋と詩が語られる時、西脇順三郎がよく登場する。例えば『西洋詩と日本の近代詩』[72] でも、英語や仏語で詩を書いていた西脇順三郎がロンドンで英詩を出版し、その後日本詩の可能性の探求へと移ったと、まるで海外で成功した初めての日本人のように書かれているが、ノグチは実はその20年以上も前にロンドンで英詩集を出版し、1925年までには日本詩集も出版していた。にもかかわらず、このような歴史的文脈で取り上げられないのである。英詩から日本詩に移ったはじめの日本人だという揺るがない事実が認知されるのはこれからの課題だといえる。

ノグチの英詩については、アメリカとイギリスという国の繋がりという点からも、課題は多い。受けた影響や評価、受容過程、当時の一般的な知名度、ノグチの詩が当時および現代の詩文化に与えた影響などは両国それぞれで違うはずだ

が、それらは今後の課題とし、ここでは、現代の一読者として、ノグチの英詩をみてみたい。

そこで、亀井俊介の、ホイットマンとノグチの詩の比較を参考に、ノグチの詩を紹介したい。まず、ノグチはホイットマンから、詩形、神秘的自然観、そして精神主義的なナショナリズムと強烈なエゴティズムなどを学び取ったのではないか、とまとめている[73]。詩形についてだが、亀井のまとめたホイットマンの詩形「自由詩」（Free verse）の際立った特徴として、①カタログ手法で日常生活に根ざしたものを並べ、理想のヴィジョンを支える柱と土台にする、②パノラマ的展望によりリアリティからヴィジョンにまで拡大する、③逆説的並列法により「逆説の精神」から現像界を乗り越え絶対的存在として自己を表現する、④Cesura（朗読上の休止点）を意味の上から構成する、⑤各行の先頭語句繰り返し、という五つを上げている[74]。亀井は、ノグチの初めの詩集『明界と幽界』ではホイットマン的な要素があまり見られないのに対して、『渓谷の聲』では、“The Song of Songs Which is Noguchi's” というタイトルがホイットマンの “Song of Myself” に、ノグチの同詩の副題の “I Hail Myself as I do Homer” がホイットマンの同詩の書き出しである “I celebrate myself, and sing myself” から取られているように、ホイットマンの東洋人的焼き直しにほかならないところまで来ている、と指摘している[75]。それが、三冊目の詩集『東海より』をピークに、次第にホイットマンから離れ始めたと分析している。だが、その後も、ノグチにホイットマン的要素は含まれ続けていた。例えば、四冊目の詩集『巡礼』に含まれている以下の詩でも、充分にホイットマン的要素が見られる。

In Japan Beyond [76]

Do you not hear the sighing of a willow in Japan,
(In Japan beyond, in Japan beyond)
In the voice of a wind searching for the sun lost,
For the old faces with memory in the eyes?

Do you not hear the sighing of a bamboo in Japan,
(In Japan beyond, in Japan beyond)
In the voice of a sea urging with the night,
For the old dreams of a twilight tale?

Do you not hear the sighing of a pine in Japan,
(In Japan beyond, in Japan beyond)
In the voice of a river in quest of the Unknown,
For the old ages with gold in heart?

Do you not hear the sighing of a reed in Japan,
(In Japan beyond, in Japan beyond)
In the voice of a bird who long ago flew away,
For the old peace with velvet-sandalled feet?

四つのスタンザに分けられているが、各スタンザの初めの二行は、一つの名詞を除けば、全て同じフレーズの繰り返しであるし、“in Japan” という二つの語句がセットになって、二行の中に三回という頻度で使われている。特に、二行目で、“in Japan beyond” とリズミカルに二回繰り返すところは、声に出して読みたくなるようなフレーズであり、日本中にという強調性を持っている。また、四つのスタンザにおける後半二行はカタログ手法と言えるバラエティに富んでいる。柳、竹、松、アシという、比較的誰でもが思い浮かべられる極めて典型的な日本の日常的な四種類の樹木を選び、その木々のざわめきが、昔あって今は無いものを理想化している。同時に、思い浮かべて、ため息を付いているように聞こえはしないかという、答えを求めていない問いかけのような詩で、思わず木々のざわめきが寂しげなため息のように聞こえてくるような、ざわめきが感じられるような世界を創り出している。そして、声の持ち主は、眼に見えない「風」か

ら、大きな対象物である「海」、それよりも小さな「川」そして「鳥」というように、遠くにむいていた視点が少しずつ焦点を定めている。最後のスタンザの、ずっと昔に飛び去ってしまった「鳥」は、ノグチ自身かもしれない。読む人に、目の前に想像の世界を持たせるような構成となっている。

また、次の詩も同じく『巡礼』で発表された詩だが、逆説的並列法を使い、それが大きな効果を与えている。

Right and Left (77)

The mountain green at my right:
The sunlight yellow at my left:
The laughing winds pass between.

The river white at my left:
The flowers red at my right:
The laughing girls go between.

The clouds sail away at my right:
The birds flap down at my left:
The laughing moon appears between.

I turned left to the dale of poem:
I turned right to the forest of Love:
But I hurry Home by the road between.

四つのスタンザで、右左、左右、右左、左右と交互に使われており、逆説的並列法の中にも、更に二層目の逆説が見られる。また、はじめの二つのスタンザでは、左右に二つに色をつけ、原色が単純すぎるかと思えるが、頭に思い浮かべや

すくもある。そして、その二本の色の真ん中を通り抜けるという三行目が、まるでその音が聞こえてくるかと思えるほど、意外にも現実的な動きを想像させるのである。初めの二つのスタンザは想像の世界で収まってしまうほど軽めな内容だが、三つ目のスタンザに誰もが日常的に感じる現実的な場面を持って来て現実味を持たせていることで、四つめのスタンザで哲学的なものを語っても唐突な感じがせず、その理想をすんなりと受け入れられるような運びになっている。詩と愛の間をバランスをもって進む、それがノグチが目指す方向性なのだと、まるでくっきりとその路が見えてくるようである。そして、ホイットマンのように、逆説的なものをカタログ方式で並べながら、絶対的存在としての自己を表現しているようである。

このように、ノグチはホイットマンからの詩法を自分なりにアレンジしながら、アーサー・ランサムも認めたように、手で触る事の出来ないものや描写できないものを通して理想的な現実を表わそうとした[(78)]。また、それらの表現が、国籍を越えた多くの人の心に響いたものであることは、海外でノグチについて書かれているランサムなどの評論の他、エズラ・パウンドがノグチに送った手紙にある、“Of your country I know almost noting – surely if the east & west are over to understand each other that understanding must come slowly & come first throught [sic.] the arts”[(79)] などに明らかである。

4. ヨネ・ノグチの日本詩

次に、ノグチの日本詩を具体的に少し見てみたい。ノグチが残した、791本に上ぼる日本詩は多くの課題を投げかける。例えば、当時の日本詩の世界という文脈に置いて、ノグチの詩がどのように取られるのが相応しかったか、当時の日本の詩人達の社会的背景、また当時の英米文壇を実際に知るノグチが当時の日本の詩人たちに齎した本当の影響や、ノグチが後世の（例えば2008年現在における）詩人たちに及ぼした影響、ノグチ独自の日本語表現、当時の詩人達との細かいやり取りから見えるノグチが感じていたであろう疎外度や、疎外されたからこそ貢

献できた点など、ノグチの日本詩についての課題は山積みであり、今後の研究を待たなければならない。現時点で思いもつかぬ課題も多々あるだろうと予想できるほど、ノグチの日本詩をめぐる課題は山積している。ここでは、ホイットマンの影響やイギリスのロマン派の影響がまだまだ現れていると見えるノグチの詩のほんのいくつかを紹介したい。

まず、先ほどの “Right and Left” の邦訳「右と左」である。これはまず、『二重国籍者の詩』、その後改稿されて、『野口米次郎英選詩集』と『表象抒情詩』にも収録された[(80)]。

右と左[(81)]

青い山は私の右に、
黄色の日光は私の左に、
笑ふ風はその間を過ぎゆく。

白い川は私の左に、
赤い花は私の右に、
笑ふ處女はその間を行く。

雲は私の右を帆走り、
鳥は私の左を飛び降る、
笑ふ月はその間に顕はれる。

私は左へ向いて詩の谷へ、
私は右へ向いて戀愛の森へ…
だが、家路へとその道を急ぐ。

漢字で書く「右と左」は、英語の “Right and Left” よりも、見た目に似ている

ようでいて違うために、英語よりも、より意図的に逆説的並列をした感があり、日本詩としては、新鮮な試みだったに違いない。似たような、又は同じ語句の繰り返しを伴った逆説的並列を通して、更に新しい展開の方法を紹介したのではないか。元の英語版と比べると、いくつかの点が見えてくる。英語だと “green” だった山の色は「青く」なり、複数形だった “Red flowers” や “Birds” は、ぽつりと一輪の赤い花、ふわっと飛び降りて来たたった一羽の鳥、“clouds” が大きな塊を感じさせたのが、「雲」という単語により、綿菓子をちょっと大きくしたくらいのもののような感じを与える。リズムに重きを置き、あえて複数にすることにこだわらなかったようだが、浮かんでくる光景にもあまり広がりがない。更に、英語では、形容詞としての色が名詞の後に付いていたために、独特のリズムを生み出していたが、日本語では、色が名詞の前に置かれているので、原色が強調され過ぎている感があり、却って安っぽいイメージを与えているようである。邦訳してみたものの、違うものになってしまったのではないだろうか。

次に、「東洋的想像よ」という詩である。この詩は、『沈黙の血潮』に掲載されたが、改訂版の有無や、初出などは現時点で明らかではない。

東洋的想像よ [82]

降る雪を花と見立てる東洋の想像に対し私は感謝する。
冬の霜や風に春の音信を聞く東洋の想像に対し私は感謝する。
四季から冬を奪って、室内に春を想像する東洋的態度は、
必ずしも冬を恐れるからで無い、
一日も早く春の法悦に俗したい希望からであると信じます
ああ、東洋的想像よ、
あなたは決して卑怯者では無い、
あなたは無を有とする勇者です。
あなたのお陰で私達は此小さい島を大きな世界として数千年間生きて
　　来ました。

この貧しい生活を喜ばしい幻像で包んで生きて来ました。
ああ、東洋的想像よ、
あなたは私達の眼界から實在を奪ったのでない、
あなたは私達に第四次（フォス・ダイメンション）の世界を与えました。
少なくとも私があなたを失ったならば、
その時こそは、日本といふ故國に告別して、
紐育か倫敦の郊外に移住するでありませう。
ああ、東洋的想像よ、
なんだか私はあなたに離れさうに思はれます。
どうか私をしっかり捉へて居てください－－
私の二つの手はここにあります、
その手をぢつと握っていてください。
（以下、省略）

この詩の興味深いところは、東洋的想像という、どのようにイメージすれば良いかわからないような抽象的なものへの呼びかけである点だといえる。ホイットマンは、よく呼びかけを使った。例えば、“Crossing Brooklyn Ferry” では、第9節で “Flow on, river! flow with the flood-tide, and ebb with the ebb-tide!” (83) や、“Stand up, tall masts of Mannahatta! stand up, beautiful hills of Brooklyn!” (84) のように、川やマンハッタン、ブルックリンに呼びかけている。それらは巨大すぎて一度に視野に収まるものではないが、それでも目に見えるものへの呼びかけである。ノグチは「東洋的想像」という日本人の間でも曖昧な概念に呼びかけに対して、ノグチ独自の世界を創り出してしまっているところが、如何にも、西洋で暮らした経験を持つノグチらしい。そもそも、ノグチのいう東洋的想像というのは何か。この詩からは、自然を、ありのままの現象だけで見ないで、そこにあらゆる意味を加え、自然が齎す意味やその意味が齎す人間の暮らしをより豊かに

するような想像力であるようだ。本論文の第I章に紹介した通り、萩原朔太郎はノグチの日本詩は題材選びからして外国人らしい、と言っているが、そのような批判とも賛美とも受け取れる言葉は、この詩にも当てはまるだろう。「ああ、東洋的想像よ」というフレーズを数回繰り返しているために、悲痛な呼びかけのようである。また、最後の二行は、妙に現実味を与えるが、実際に、東洋的想像に手を握られるということはどういうことなのか。つまり、自分で東洋的想像に掴まっているのではなく、それに捕まえられていなくては、どこかへ行ってしまうほど揺れているのだろうか。そうだとすれば、揺れる原因になっている西洋的想像にそれほど引かれているのだろうか。これは、ノグチ一人のことだけではなく、日本全体が西洋的な観点からものを見始め、西洋的思想に染まり始めたことを悟ったノグチの比喩だったとも受け取れる。どちらにしても、この呼びかけと、この詩が描き出す状況は、想像できるようであって難しい点、普段の何気ない日本の暮らしの中から「東洋的想像」などという哲学的なものを抜き出して名詞化している点を含んだ、新鮮な詩だった、と考えられる。

次に、「向日葵」という詩である。この詩は、英語版『巡礼』に "To the Sunflower" が載せられた後、『二重国籍者の詩』、『野口米次郎英詩選集』、『林檎一つ落つ』それぞれで、邦訳の改訂版が発表されている[(85)]。

向日葵[(86)]

お前は情調から破れ出る。
私共は悲しくも経験に執着する。
お前の各原子は、生命の奇蹟に燃える、
如何に充實の生命にお前は生きるよ。
日光に生きる情熱家、
誇りある青春の表象（シンボル）
お前は顔を寒気に向け、影に向けようと思ったことがあるか。
お前は舞上がる色彩の抒情詩だ、

無言の詩にお前は飛躍する。
お前は生命の意味を呑みほし・・・
ああ、驚くべき自意識、
ああ、壮大な存在感。

この詩は、ウィリアム・ブレイク（William Blake: 1757-1827）の “Ah! Sunflower” (87) を連想させる。人間がいかに人間同士の関係性を気にして生きているかに対し、向日葵はいかに素直に生きているのか。表現や語句は違うが、内容は非常に似ている。ノグチがブレイクを好んで読んだという記録には出会っていないが、キーツやワーズワースが好きだったノグチのこと、ブレイクを読んでいても不思議はない。また、この詩は、ホイットマン的要素も入っているとも言える。「お前」という語句を何度か繰り返しながら、向日葵という、誰でも知っている草花を選び、まるで気の知れた友人に呼びかけているかに聞こえる。また、向日葵に向かって呼びかけているようでいて、独り言のようにも聞こえ、実は私たち人間に聞いてほしいのだな、と感じる呼びかけでもある。更に、先ほどの「東洋的想像」には「あなた」と言っていただけではなく、「どうか…」と謙っていたのに対し、向日葵には少々強気に「お前」と言っているあたりは、日本語ならではの距離感の表現である。亀井が指摘した、ノグチがホイットマンから受けた影響の一つが神秘的自然観であったが、時には、この向日葵のように、距離感を縮めながら、時には、拝むようにひたすら賛美しながら、ノグチは、自然を通して理想の生き方を語る詩法を日本に広めたかったに違いない。

このように、ノグチは欧米で学んで来た詩法や思考様式を、日本語でも表わそうと試みた。

III. 結論とこれから

本論文を通して提示したように、ヨネ・ノグチは、その72年の生涯で、日本人として他に類を見ない程、数々の国際的な業績を残した。本論文で取り上げた

以外にも、日本と欧米の文化史を研究する上で見逃せない点は多数ある。ノグチは、10年の英米での生活を終えて帰国した理由を、いくらそこに住んでいたとしてもイギリス人にもアメリカ人にもなれる理由がない、と語ったのは前述した通りである。日本に帰国すれば当然のように何も疑問を抱かずに母国に所属しているという確かな安堵感を得られることを思い描いて帰国を決意しただろう。日本人であるということすら認識もしない生活を予想していたかもしれない。だが、帰国後の日本で予想以上に異邦人に仕立てられてしまったノグチは、散文を通した日本と西洋の文化の橋渡しを自分の役割と思うようになり、務めたのではなかったか。

このように、日本に居ながら周縁に追いやられ、自らも周縁に居場所を求めて生きてきたノグチは、ポオの人生に共感を覚える、と書き残している。エドガー・アラン・ポオは、19世紀のアメリカ人の詩人であり、作家である。アメリカで生まれ育ち、生涯、国外に出なかったにも関わらず、ポオが書いた多くの作品はアメリカらしさを連想させない、と言われている。作品は今日でも読まれ続け、アメリカ文学のアンソロジーにも含まれ続けている。だが、一方で、ポオをアメリカ文学史の中でどこに位置づけたらよいかと悩む学者も多いほど、ポオは異端者なのである。ポオの作品をノグチに紹介したのは、ミラーであった。ポオは、既にこの世の人ではなかったが、ノグチはポオに不思議なほど親近感を覚え、ホイットマンの詩と同じくらいにポオの詩を読みふけり、ポオの夢をみたり、ポオに自分を重ね合わせ、自分がポオであると錯覚する程だった、と語っている。ついには、サンフランシスコで詩人として駆け出しの頃、ポオの詩の一部分を盗作した疑いをかけられ、ミラーやジレット・バージスに弁解してもらう、という事件もあった[88]。そのノグチは、1926年、『ポオ評伝』[89]というブックレットを出版した。評伝は、ポオをどのように評価したらよいものか考えあぐねている、という率直な気持ちで書き始められている。だが、その文章は「ポオ」の部分を「ヨネ・ノグチ」に置き換えると、ノグチ自身について語ったものとして読むこともできるものとなっている。

散文抜きで［ポオ］を考へることは不可能である、又詩抜きで彼を考へることは、彼に対する冒涜であり侮辱である。彼は散文と詩との両端を、世界に稀な理智と想像の力で橋掛けた。然し彼の散文が彼を尽きない批評の問題としている所からいうと、彼は散文の人で、彼を従として取扱ったものとも見える。［ポオ］自身では詩の人と信じたに相違いないが、収穫の外側から見ると、彼に対する散文は主となっているように見える。少なくとも彼は散文のお陰で、世界の文学史に沢山の頁を割かしている[(90)]。

ノグチが、この『ポオ評伝』を出版した時、『二重国籍者の詩』の発表から6年経っていた。ポオは、ノグチとは違い、二カ国語で書いたり、二カ国の狭間に落ち込んだわけでもない。だが、ノグチは、ポオの評伝執筆を通して、母国に居ながら益々疎外されてゆく自分の境遇を重ね合わせたはずである。ノグチはこの評伝を通して、ポオへの尊敬を表明しただけではなく、ポオの人生のあらゆる面を弁護している。更に、アメリカ人が、同国出身のポオに正しい理解を寄せていないことも非常に残念がっている。

米国人はその現実的悲哀を見て同情しないばかりか、この憐れな其の一生を歌舞伎芝居のように徒に強烈な色彩で塗りたてている。そしてどうしても彼を平和な無害な人情の人間と見ることを承知しないようである。彼は誇張の筆で後世に誤り伝えられたかの感がある…かかる文学者は世界広しともその比較を見ない[(91)]。

ノグチは、1926年出版『ポオ評伝』を、「一言で言うと、ポオは米国文壇の異端者だ。私は彼を異端者だと賛美してこの評伝を終る」[(92)] という文で締め括っている。異端者として、また、異端者を応援する一人の知識人としての堂々とした自信が感じられる一言である。ところが、1934年に研究社から出版された改訂

版『ポオ評伝』には、最後の一文が含まれておらず、「一言で言うと、ポオは米国文壇の異端者だ」[93] で終っているのだ。この間8年、ノグチの考え方にどのような変化が生じて、最も力強かった最後の一文を取り除いたのであろうか？ また、異端者のポオであっても文学史に含まれ続けているアメリカ文学と、異端者であったためにノグチが除外され続けている日本文学史の違いは何であろうか？

亀井は、ノグチに見られるような二重性は、決してノグチ一人だけの問題ではなかった筈である[94]、と指摘している。明治以降、日本には常に、西洋化（及び、アメリカ化）という現象と、それに反発しようとする「純日本化」の両方が混在していたのだ。グローバル化が進んでいる今日に至っては、日本人だけではなく世界各地の人々が直面している、アイデンティティ、国や国籍、文化などに関わる問題のはずである。

ノグチと同じ時代を生きた詩人の金子光晴は、2度の渡欧を経験し、「それは…僕を、中途半端なエトランジェーにしてしまった。外国生活の間の僕の異邦人は、日本へ帰って来ても、そのままもちこされてしまった」[95] と書いている。その後の生涯は日本で過ごし、作品も日本語で残したが、日本のある友達から、「光っちゃんのしごとは、結局、日本の文学とは無縁なんじゃないか。そうでしょう？きれいに花は咲いても、種子もとれないし、移植をしても来年は花が咲かないという木があるでしょう」[96] と言われ、図星とも思えるところを意見された、と認めている。これは、ノグチの人生にも当てはまる言葉である。ノグチや金子の境遇をみれば明らかなように、少なくとも当時の日本には、彼等が見事な花を咲かせ続けられるような土壌が整っていなかったのだ。そのような土壌作りは、今日の社会において、必要に迫られているのではないだろうか。

疎外され、アイデンティティの確立が困難になる、ディアスポラと呼ばれている現象がある。一般に、祖国から物理的に離れてしまっている人を指し、「ディアスポラ的な意識＝故郷からの離散」[97] とされる。故郷を支持し続けながらも、自分のエスニシティとして故郷のものを採用することに抵抗し続けることがディアスポラだ[98]。ノグチの人生は、物理的に故郷から離散していた訳でもなく、

日本人というアイデンティティに抵抗していた訳でもないため、ディアスポラは当てはまらない。ノグチは、帰国し、恐らく無意識のうちに「日本人」というものをエスニシティとして過度に採用したが、ノグチ程に一度外国を知ってしまった者は純粋な日本人でないと見なされ、最終的には、母国における「異邦人」となり果ててしまった。ディアスポラとしての人生を送る人々の多くが、国の政治的状況などが原因で強制的に祖国から離れなければならなかった人たちであるのに対し、ノグチは、自分の自由意志で祖国を離れ、自分の意志で帰国した結果の、異邦人なのだ。今後、グローバル化が進むにつれ、ノグチと似たような経緯を歩み、前述したようなトランスカルチュラリズムを経て、祖国に居ながら「異邦人」と自他共に認めるような人材が増え続けて行くであろう。いつまでも、従来の枠に当てはめて歴史を作っていたのでは、ノグチのような人物はどこからも取り上げられずに終わってしまう。

外山は、ノグチの「旅行者」という詩を読むと、フランスの詩人、シャルル・ボードレール（Charles Pierre Baudelaire: 1821-1867）の「異人（L'Etranger ）」という散文詩を思い出すと述べている。ノグチの詩は、ボードレールの散文詩の日本版と思うほど象徴的な技法が似ている、というのだ[99]。ここで、その2つの詩を紹介したい。始めに、ボードレールの「異人」である。

異人[100]

——君の最愛の者は誰か、謎の男よ、告げよ？　父か、母か、妹か、
　はたは兄か？
——父も、母も、妹も、兄も、僕にはないよ。
——友人か？
——君のいうその言葉の意味を、今日まで僕は知らないんだ。
——祖国をか？
——僕は知らない、地上いずこにそれが在るか。
——では、美女か？

——愛しもしようさ、女神のようにつつましく、不死の美女なら。
——そんなら金か？
——僕はそいつを憎む、君が神を憎むように。
——そんなら君は何を愛するのか、風変わりな異人よ。
——僕はあの雲を愛する…、遠くみ空を流れ行くあの雲を…、
　　素晴らしいあの浮雲を！

次に、ノグチの詩、「旅行者」の全文をあげてみる。この詩は何度か改訂されたが、下記に引用したのは、『表象抒情詩』の中に収められていた最終版である。

旅行者 (101)

「あなたの髪は薄い、頬骨は高い、譬へると冬の禿げ山だ。
静寂の姿はいいが、あなたの眼の倦怠の微光が気にかかる。
あなたは、どなたですか。」

「私の名前など話した所で詰らない……風のような旅人に過ぎない。
時（タイム）という噛み煙草をのべつに噛んだため、私の歯は黄ばん
　　で仕舞った。
人は私の口の臭気に辟易するであらう。」

「いや、私は臭気などを恐れるものでない、
どうか人生の旅行談一つ二つ、私に聞かしてください。」

「君の若い時代のエレン・テリーが想像されるだらうか……。
私はエレンの奇麗な髪と純白な曲線美にほれぼれした。
キュウ・ガーデンの青い草で英国の春は尽きるであらう。
草と草の間から顔を出すチューリップは、まるで小さい仙女だ。

私は礼儀正しい東洋人であることを喜んだ……
チェルシーで、カーライルの銅像へ朝の挨拶さえしたこともある。」

「ああ、一体どなたですか。」

「幾千万とある旅行者の一人だといって置かう。
幻のように感激と反省との間を歩いて、
風の如く、空中にきえてゆく人間に過ぎない。
君は私の名前を聞いて、どうなさる。」

両者ともに、祖国におさまって生きて来た者の質問に答えるという形式で書いている。質問者たちは、この異人／旅行者それぞれを、もっと確かなものと結びつけて、そのアイデンティティを確立させようとしているが、その期待を裏切るかのように、彼等は質問者の理解の範疇を越えた広い世界で生きていると応じる。ボードレールの、「そんなら君は何を愛するのか、風変わりの異人」という問いへの、「僕はあの雲を愛する」という答えは、詩的で、広がりと強さを感じさせるが、同時に寂しさも漂わせている。一方、ノグチも、何者か問われているにも関わらず、「幾千万とある旅行者の一人」で、「風の如く、空中にきえてゆく人間にすぎない」と答え、やがて忘れられるのなら、初めから気にされない方が余程良い、と言わんばかりだ。雲と風、どちらもその時には存在しても、永遠に続くことは約束されていないどころか、あまりにも儚い。両者とも、家や家族や故郷などどこにも持つまい、という決心と孤独を必死に詩的に表現しようとしているが、強がりに聞こえる節もある。孤独感を今更告白しても、何も変わらないのだ。ボードレールとノグチが生きた時代は異なるが、両者の共通点の一つは、この地球上での移動が現在よりもはるかに困難だった時代に外国を体験してしまった者のみが感じた疎外感だろう。

「異邦人」的な人物は、彼等自身のトランスカルチュラルな人生を通して創り

出した文化によって社会に齎すことのできる多くの独自の可能性を秘めている筈である。グローバル化が進む今日だからこそ、ノグチの様な先駆者の再評価は急がれているだろう。

* 編注：本論文は『ICU比較文化』編集委員会が2008年10月31日に受領したが、編集上の事情により本号への掲載となったものである。

注

（1） 内田魯庵「世界的に承認される亜細亜の詩人」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術協会出版局, 1965）p.115:「日本の文芸家からノーベル賞金の受領者を詮衡するとしたら、差向き第一に選に上るは野口ヨネ君であらう」

（2） Noguchi, Yone. *Seen and Unseen; or, Monologues of a Homeless Snail*. (San Francisco: Gelett Burgess & Porter Garnett, 1897, 1st ed.).

（3） Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea*. (London, Privately Printed, 1903, 1st ed.); Noguchi, Yone. *From the Eastern Sea*. (London: Unicorn Press, 1903, 2nd ed.).

（4） 「のべ」というのは、ノグチは同じ著作でも改版の際に初版と第2版をそれぞれ別に数えているため。

（5） *New York Times*, July 15th, 1945, p.23

（6） 野口米次郎『二重国籍者の詩』（東京：玄文社, 1921）pp.1-2

（7） 外山卯三郎編『詩人 ヨネ・ノグチ研究』全3巻（東京: 造形美術協会出版局, 1963-1975）;『詩人ヨネ・ノグチの詩：その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』（東京: 造形美術協会出版局, 1966）

（8） 外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチの詩：その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』（東京：造形美術協会出版局, 1966）p.26

（9） 萩原朔太郎「野口米次郎論」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術協会出版局, 1965）p.15

（10） 同上 p.21

（11） 同上 p.17

（12） 同上 p.18

（13） 同上 p.19

（14） 同上

（15） 同上 p.20

（16） 同上

（17） 外山卯三郎「萩原朔太郎の見た詩人野口米次郎」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術協会出版局, 1965）p.91

（18） 同上

（19） 萩原朔太郎「野口米次郎論」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術協会出版局, 1965）p.20

（20） これらの数は、今後変更される可能性が多分にある。詩集として出されている作品が全て含まれているかが不確かなためである。また、ノグチは同じ作品を複数の詩集に納めているが、2冊以上の詩集に納められている詩のうち、少々編集してあるものと、または全く同じものの両方があるようである。例えば、*From the Eastern Sea* という、1903年にロンドンで自費出版した詩集（16ページ、詩8篇）は、ロンドンの文壇から好評を得たために第2版を London Unicorn Press から出版した。第2版は、73ページ、詩も28篇追加 されているが、そのうちのいくつかは、その前にサンフランシスコで出版した詩集に入っているものの再録なのである。それらの細かい計算をすれば、ノグチが残した詩の数が正確に出る筈だが、本論文では、ノグチの作品のうちの詩についての概要を掴む事しかできなかった。

（21） Kamei, Shunsuke. *Yone Noguchi, an English Poet of Japan: an Essay*. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1965) p.12

（22） *Ibid*.

（23） “Opinions” in Noguchi, Yone. *From The Eastern Sea*. (3rd ed.) quoted in *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. Kamei, Shunsuke ed. (Tokyo: Edition Synapse, 2007) p.27

（24） 野口米次郎「シェリーの長椅子」『英語研究の70年』（東京：研究社, 1975）pp.227-8

（25） “Opinions” in Noguchi, Yone. *From The Eastern Sea*. (3rd ed.) quoted in *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays*. Kamei, Shunsuke ed. (Tokyo: Edition Synapse, 2007) p.2

（26） Noguchi, Yone. *Yone Noguchi Collected English Letters*. Atsumi, Ikuko. ed. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975) をはじめとする書簡集などを参考にしてまとめた。

（27） Ransome, Arthur. *Portraits and Speculations*. 亀井俊介編/解説『ヨネ・ノグチの英文著作』（東京: Edition Synapse, 2007）所収. p.192

（28） Lawrence, D.H. *The Letters of D.H.Lawrence*. Boulton, James T. ed. (Cambridge and New York: Cambridge University Press, 1979-2000) vol. 1-8. p.61, no.636. To Marsh, Edward. 18 [-20] August 1913: “...And if the mood is out of joint, the rhythm often is. I have always tried to get an emotion out in its own course, without altering it. It needs the finest instinct imaginable, much finer than the skill of the craftsmen. That

Japanese Yone Noguchi tried it. He doesn't quite bring it off. Often I don't – sometimes I do. Sometimes Whitman is perfect."

(29) 和田桂子「野口米次郎のロンドン（7）—日本詩歌論をめぐって—」『大阪学院大学外国語論集』第40号（大阪学院大学外国語学科, 第40号, 1996）pp.31, 35-6注（28）を参照。

(30) 亀井俊介「ヨネ・ノグチの日本主義」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術出版局, 1975）p.146

(31) Gould, Axelrod Steven; Roman, Camille; Travisano, Thomas ed. *The New Anthology of American Poetry: Modernism:1900-1950*. (New Jersey: Rutgers University Press, 2005); Gioia, Dana; Mason, David; Schoerke, Meg ed. *Twentieth-Century American Poetry*. (Boston: McGraw-Hill Humanities/Social Sciences/Langua, 2003); Kale, Tessa ed. *The Columbia Granger's Index to Poetry in Anthologies*. (New York: Columbia University Press, 2007); Hass, Robert ed. *American Poetry: The Twentieth Century : Henry Adams to Dorothy Parker*. (New York: Library of America, 2000).

(32) 金子光晴「野口米次郎・人と作品」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術協会出版局, 1975）p.95

(33) 川路柳虹「一詩人への尊敬」読売新聞1926年2月8日朝刊4面

(34) 内田魯庵「世界的に承認される亜細亜の詩人」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術協会出版局, 1965）p.116

(35) 外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチの詩：その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』（東京：造形美術協会出版局, 1966）p.130

(36) 同上 p.132

(37) Noguchi, Yone. *Yone Noguchi Collected English Letters*. Atsumi, Ikuko ed. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975).

(38) 高井蒼風『英詩人ヨネ・野口の栄光：その英米における遍歴苦闘の秘録』（東京：紀尾井書房, 1985）

(39) 同上 pp.2-3

(40) 1986年、昭和61年

(41) 同上

(42) 亀井俊介編/解説『ヨネ・ノグチの英文著作』（東京: Edition Synapse, 2007）p.7

(43) Kamei, Shunsuke. *Yone Noguchi An English Poet of Japan*. (Tokyo, The Yone Noguchi Society, 1965) p.45

(44) 近藤史人『藤田嗣治「異邦人の生涯」』（東京：講談社, 2006）p.150

(45) トランスカルチュラリズムという語の定義については、江淵一公「トランスカルチュラリズムの研究—文化人類学・異文化教育学の視角—」『トランスカルチュラリズムの研究』江淵一公編（東京：明石書店, 1998）pp.21-26, 48-49を参考にした。

（46） Noguchi, Yone. *Collection of Letters and Papers from Yone Noguchi*. (University of California, Berkeley, Bancroft Library, BANC MSS C-H 127).

（47） Noguchi, Yone. *The Pilgrimage*. (Kamakura: the Valley Press; Yokohama: Kelly & Walsh, Limited, 1909).

（48） 外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチの詩：その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』（東京：造形美術協会出版局, 1966）

（49） 同上 p.129. 更にp.156 には「Whitman 独自の詩の構成やLeaves of Grassの毎版宛に変わってゆくことは、研究社版『英米文学事典』（齋藤勇博士編、昭和12年10月15日刊）1007頁にも記されている」とある。

（50） 同上 p.73

（51） 同上 p.74

（52） 同上 p.75

（53） 同上 p.83

（54） Rosssetti, William M. “Afterword,” quoted in Noguchi, Yone. *Pilgrimage*. quoted in Noguchi, Yone. *Selected English Writings of Yone Noguchi*, an *East-West Literary Assimilation*. vol.1: Poetry. Hakutani, Yoshinobu. ed. (London and Toronto: Associated University Presses, Inc., 1990) p.160

（55） *Ibid*.

（56） 野口米次郎『野口米次郎英詩選集』（東京:アルス, 1922）

（57） 外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチの詩：その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』（東京：造形美術協会出版局, 1966）p.121

（58） 同上 p.122

（59） 山宮允「野口米次郎論」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術出版局, 1963）p.126

（60） 亀井俊介「東京大学新聞評」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術出版局, 1965）p.304

（61） 齋藤勇「ヨネ・ノグチ」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術出版局, 1963）p.33

（62） 佐藤一英「無の中の影（ゴヘンサマの詩人・野口米次郎）」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術出版局, 1963）p.119

（63） 服部嘉香「野口米次郎論」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術出版局, 1963）p.135

（64） 同上

（65） 大江満雄「『詩人ヨネ・ノグチ研究』を読んで」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術出版局, 1975）p.247

（66） 亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』（東京：研究社, 1970）pp.351-

374

(67)　野口米次郎「私の発想に就て—岩野泡鳴君に答ふ」読売新聞 1916年1月21日朝刊7面

(68)　同上

(69)　同上

(70)　野口米次郎, 三木露風, 千家元麿, 日夏耿之介『現代日本文学全集73：野口米次郎, 三木露風, 千家元麿, 日夏耿之介』（東京：筑摩書房, 1956）p.16

(71)　同上

(72)　伊藤信吉他編『現代詩鑑賞講座』第1巻（東京: 角川書店, 1969）

(73)　亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』（東京：研究社, 1970）p.358:「精神主義的なナショナリズム—建国の理想の崩壊の危機にあるアメリカに精神的活力を復活せしめようとする努力—ノグチはこれをアメリカの物質主義に挑戦する東洋の精神主義の形に転化した」「強烈なエゴティズム－－精神主義のもっとも手近なあらわれとして自己を神にまでたかめる態度。」

(74)　同上 pp.79-86

(75)　同上 p.360

(76)　Noguchi, Yone. *Pilgrimage Vol.2*. (Kamakura: the Valley Press; Yokohama: Kelly & Walsh, Limited, 1909) pp.112-113.

(77)　同上 p.93

(78)　Ransome, Arthur. *Portraits and Speculations*. 亀井俊介編/解説『ヨネ・ノグチの英文著作』（東京: Edition Synapse, 2007）所収.　p.189

(79)　Noguchi, Yone. *Yone Noguchi Collected English Letters*. Atsumi, Ikuko. ed. (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1975) p.211

(80)　外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチの詩：その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』（東京：造形美術協会出版局, 1966）p.383

(81)　同上 pp.214-215

(82)　日夏耿之介他編『日本現代詩大系』第6巻（東京:河出書房, 1949）p.17

(83)　Whitman, Walt. “Crossing Brooklyn Ferry,” *The Norton Anthology American Literature Shorter Fifth Edition*. Baym, Nina, ed. (New York and London: W. W. Norton & Company, 1999) p.1036

(84)　同上 p.1037

(85)　外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチの詩：その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』（東京：造形美術協会出版局, 1966）p.382

(86)　同上 p.184

(87)　Blake, William. *Songs of Innocence and of Experience*. (The Pennsylvania: Franclin Center, 1980) p.80

(88)　野口米次郎『英米之十三年』（東京：春陽堂, 1905）pp.7-10
(89)　野口米次郎『ポオ評伝』（東京：第一書房, 1926）
(90)　同上 p.1［　］は筆者。この［ポオ］を［ノグチ］と置き換えれば、ノグチの自己評価として通用するだろう。
(91)　同上 p.102
(92)　野口米次郎『ポオ評伝』（東京：第一書房, 1926）所収；野口米次郎『野口米次郎選集』3 海外文学・持論（東京：クレス, 1998）p.169
(93)　野口米次郎『ポオ評伝』（東京：研究社, 1934）p.105
(94)　亀井俊介「ヨネ・ノグチの日本主義」外山卯三郎編『詩人ヨネ・ノグチ研究』（東京：造形美術出版局, 1966）p.123
(95)　佐伯彰一, 松本健一監修『作家の自伝13　金子光晴』（東京：日本図書センター, 1994）p.200
(96)　同上
(97)　チョウ, レイ『ディアスポラの知識人』本橋哲也訳（東京:青土社, 1998）p.33
(98)　同上 p.46
(99)　外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチの詩：その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』（東京：造形美術協会出版局, 1966）p.158
(100)　堀口大学訳/編『ボードレール詩集』（東京：新潮社, 1948）p.163. ボードレール自身によって編纂されたものではなく、堀口大学による抜粋および翻訳。
(101)　外山卯三郎『詩人ヨネ・ノグチの詩：その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』（東京：造形美術協会出版局, 1966）p.158

参考文献

＜日本語文献＞

伊藤信吉他編『現代詩鑑賞講座』第1巻（東京: 角川書店, 1969）
『英語研究』編集部編『英語研究の70年：もう一つの日本英学史 1908-1975 論文・復刻』（東京: 研究社, 1975）
江淵一公編『トランスカルチュラリズムの研究』（東京: 明石書店, 1998）
亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』（東京: 研究社, 1970）
亀井俊介編 / 解説『ヨネ・ノグチの英文著作』（東京: Edition Synapse, 2007）
川路柳虹「一詩人への尊敬」読売新聞1926年2月8日朝刊4面
近藤史人『藤田嗣治「異邦人の生涯」』（東京: 講談社, 2006）
佐伯彰一, 松本健一監修『作家の自伝13　金子光晴』（東京: 日本図書センター, 1994）
高井蒼風『英詩人ヨネ・野口の栄光：その英米における遍歴苦闘の秘録』（東京: 紀尾井書房, 1985）
チョウ, レイ『ディアスポラの知識人』本橋哲也訳（東京:青土社, 1998）

ドウス昌代『イサム・ノグチ—宿命の越境者—』（東京: 講談社, 2003）
外山卯三郎編『詩人 ヨネ・ノグチ研究』全3巻（東京: 造形美術協会出版局, 1963-1975）
————.『詩人ヨネ・ノグチの詩 : その「日本語詩」の成立に関する芸術学的研究』（東京: 造形美術協会出版局, 1966）
野口米次郎『英米の十三年』（東京: 第一書房, 1905）
————.『二重国籍者の詩』（東京: 玄文社, 1921）
————.『野口米次郎英詩選集』（東京: アルス, 1922）
————.『ポオ評伝』（東京: 第一書房, 1926）;『ポオ評伝』（東京: 研究社, 1934）;『野口米次郎選集3』（東京: クレス出版, 1998）
————.『表象抒情詩』全3巻（東京: 第一書房, 1925-1927）
————.「私の発想に就て一岩野泡鳴君に答ふ」読売新聞1916年1月21日朝刊7面
野口米次郎, 三木露風, 千家元麿, 日夏耿之介『現代日本文学全集73：野口米次郎, 三木露風, 千家元麿, 日夏耿之介』（東京: 筑摩書房, 1956）
日夏耿之介他編『日本現代詩大系』第6巻（東京: 河出書房, 1949）
ボードレール, シャルル『ボードレール詩集』堀口大学訳/編（東京: 新潮社, 1948）
和田桂子「野口米次郎のロンドン（7）—日本詩歌論をめぐって—」『大阪学院大学外国語論集』第40号（大阪学院大学外国語学会: 第40号, 1996）

＜英語文献＞

Baym, Nina ed.. *The Norton Anthology American Literature Shorter Fifth Edition* (New York and London: W.W.Norton & Company, 1999).
Blake, William. *Songs of Innocence and of Experience* (The Pennsylvania: Franclin Center, 1980).
Gioia, Dana; Mason, David; Schoerke, Meg eds.. *Twentieth-Century American Poetry* (Boston: McGraw-Hill Humanities/Social Sciences/Langua, 2003).
Gould, Axelrod Steven; Roman, Camille; Travisano, Thomas eds.. *The New Anthology of American Poetry: Modernism:1900-1950* (New Jersey: Rutgers University Press, 2005).
Hass, Robert ed.. *American Poetry: The Twentieth Century : Henry Adams to Dorothy Parker* (New York: Library of America, 2000).
Kale, Tessa ed.. *The Columbia Granger's Index to Poetry in Anthologies* (New York: Columbia University Press, 2007).
Kamei, Shunsuke. Yone Noguchi, *an English Poet of Japan: an Essay* (Tokyo: The Yone Noguchi Society, 1965).
Lawrence, D.H.. *The Letters of D. H. Lawrence*. Boulton, Jamaes T. ed. (Cambridge and New York: Cambridge University Press, 1979-2000).
Noguchi, Yone. *Yone Noguchi Collected English Letters*. Atsumi, Ikuko. ed. (Tokyo: The Yone

Noguchi Society, 1975).

————. *Collection of Letters and Papers from Yone Noguchi* (University of California, Berkeley, Bancroft Library [BANC MSS C-H 127. and 78/125. 2]).

————. *From The Eastern Sea*. (3rd ed.) Kamei, Shunsuke ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays* (Tokyo: Edition Synapse, 2007). pp.95-162 (pp.1-67).

————. *The Pilgrimage*. Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays* (Tokyo: Edition Synapse, 2007). pp.1-68 (pp.1-68).

————. *Seen and Unseen, or, Monologues of a Homeless Snail* (1st ed.) Kamei, Shunsuke. ed. *Collected English Works of Yone Noguchi Poems, Novels and Literary Essays* (Tokyo: Edition Synapse, 2007). pp.1-51 (pp.1-51).

————. *Selected English Writings of Yone Noguchi, an East-West Literary Assimilation* vol.1: Poetry. Hakutani, Yoshinobu. ed (London and Toronto: Associated University Presses, Inc., 1990).

————. *The Spirit of Japanese Poetry : Wisdom of the East* (New York: E.P. Duttom and Company, 1914).

Unknown "Noguchi Yone "(New York; *New York Times*. July 15, 1947)

Whitman, Walt. "Crossing Brooklyn Ferry," *The Norton Anthology American Literature Shorter Fifth Edition*. Baym, Nina. ed. (New York: W.W. Norton & Company, 1999). p.1036.

The Fate of "L'Etranger" in Modern Japan
— Toward a Re-evaluation of Yone Noguchi —

HOSHINO, Ayako

Yone Noguchi (野口米次郎：1875-1947), the father of well-known sculptor Isamu Noguchi, was the first Japanese to publish English poetry books in both the United States and England. He wrote not only about 184 books both in English and Japanese, but also hundreds of articles for newspapers and magazines published both in and outside of Japan. Twenty-four of his works are known as poetry books today while the rest tend to reflect on Japanese culture (such as art, Ukiyoe, Noh, Haiku, and life of the Japanese) and the ways he chose to expose it to the West, as well as various aspects of western culture that he explained to the Japanese, based on his ten years of life spent in England and the United States. When he passed away on July 13, 1947, obituaries were written in not only Japanese newspapers, but also noted in The New York Times.

As many internationally recognized records as Noguchi has, almost nothing about Noguchi is widely known today in Japan, and only a few scholars have studied just limited areas of his life. The gap we see between his incredibly brilliant records and his being practically forgotten is immense.

The biggest reason seems to be attributed to a prelude poem of his first Japanese poetry book *Niju Kokusekisha No Shi* (Poetry of the Dual Citizenship Holder) published in 1921. In the poem, he wrote that he was not confident in either English or Japanese. He could not be only Japanese nor only western and felt stuck in between the two cultures while not able to define himself clearly. Perhaps he wanted to express his humbleness and self-derision on the surface of

the poem while also wanting to show the greatness of living in two languages and cultures as a poet. However, Sakutaro Hagiwara (Japanese poet) read this poetry very literally and thus only received the surface level meaning and unfortunately, following this, many other Japanese poets and literary critics followed. The prelude poetry turned out to be self-destruction. Since then, almost none of Noguchi's actual poems have been criticized or discussed; only the prelude poem of *Niju Kokusekisha No Shi*. It seems as if Noguchi determined his own fate. In this sense, the poem has been a very significant fact in his life as a poet.

Since he started writing poems with poet Joaquin Miller in California's Bay Area where the Bohemian Club was very active, he became friends and exchanged influences with those that have solid and highly reputable positions in today's history of both American and English literature, such as W.B.Yeats, William Michael Rossetti, and Arthur Ransome. While the English literary world were known to cling strongly to their long history and profound traditions, they still graciously accepted this Japanese young man, Noguchi, who had neither status nor reputation, but merely wrote poetry in their language. The English literary world generously said that their concern was not regarding Noguchi's nationality, but his conception of the poet. His achievement is simply extraordinary; therefore, Noguchi never deserves the level of ignorance currently existing within the Japanese literary world.

Japan, while on one hand very rapidly after the Meiji restoration tried to become westernized, at the same time has always maintained the phenomenon of clinging to "Japaneseness". Therefore, Japan as a whole was not ready to accept or evaluate Japanese people who had international careers. As Isamu later admitted, Noguchi was too ahead of his time. Even though he lived in his own country, he was always isolated and existed as "L'Etranger."

In today's globalizing world, there are a number of people who have lives similar to Noguchi's. The number of people who leave their country and make another country their second home while creating a third culture from their first and second cultures, continues to grow. From this, studying Noguchi and re-evaluating his life is becoming more important than ever before.